

週末の夜。僕は英磨さんの家を訪れていた。

三つ年上の彼は幼い頃からの顔見知りで、幼馴染だ。昔から僕のことをよく気にかけてくれていた。大人になって生活圏が重なってからも、この距離感是不変わらない。むしろ、近くなっただけだ。

僕が一人暮らしを始めて心細かった時、真っ先に手を差し伸べてくれたのは彼だった。英磨さんはいっただって冷静で、僕のちょっとした失敗も「大丈夫だよ」と笑ってフォローしてくれる。僕はそんな英磨さんの穏やかなところが好きだった。

(……はあ、やっぱり英磨さんの部屋は落ち着くなあ……)

モデルルームのように整えられた清潔なリビングには、彼が選んだ静かなジャズが低い音量で流れ、高級感のあるディフューザーの香りが微かに漂っている。暖色の間接照明が、柔らかな夜の静寂を演出していた。その穏やかな光の中に佇む英磨さんの彫刻のように整った顔立ちは、いつ見ても見惚れてし

もうほどに端正だ。

「はい、乙哉。今週もお疲れさま。君が好きな銘柄、冷やしておいたよ」

キッチンから戻ってきた英磨さんが、僕の隣に音もなく座り、特製のカクテルグラスを差し出した。英磨さんが作るお酒は、僕のその日の気分や体調に驚くほど合致している。バーテンダーでもないのに、彼の所作はいつ見ても無駄がなく、どこか支配的な美しさがあった。

「わあ、ありがとうございます！……ふふ、やっぱり美味しい。英磨さんの作るお酒が、世界で一番好きです」

「それは光栄だね。……でも、外ではそんな風は無防備に飲んじゃだめだよ？ 君が酔うとどうなるか、俺以外には教えたくないし……実際、俺以外には手に負えないだろうから。飲みたくなったら、いつでもここに来ればいい」

英磨さんは細めた目で僕を見つめ、いつもの穏やかな笑みを浮かべた。

「そうですね……。英磨さんがいてくれて、本当に良かったです」

（……英磨さんは本当に優しい。僕のことを、僕以上に分かってくれてる。……でも、最近ちょっと頼りすぎかもしれない。このままだと、英磨さんがいないと何もできないダメ人間になりそう……）

「この前通販でチーズを取り寄せたんだ。よかったら食べてよ」

差し出されたプレートには、僕が「食べたいな」と心の中で思っていただけの品々が、完璧な盛り付けで並んでいた。

「えっ、これちょうど食べたいなって思ってたんです……！ 嬉しいです！」

「たまたま注文しただけだけど、それはよかった。……そうだ、来月の週末だけど。君が行きたがって

いた隠れ家レストラン、予約が取れた。空けておいてくれるね？」

「あ……えっと、それなんですけど……」

僕はカクテルを一口含み、少し言い淀みながら口を開いた。

「実は、職場の小野先輩にそのお店の話をしたら、『俺も行きたかったんだ』って言われて……。今度、二人で行くことになっちゃったんです」

単なる予定の報告のつもりだった。けれど、その言葉を口にした瞬間、英磨さんがグラスをテーブルに置くコツンという音が、驚くほど重く室内に響いた。

英磨さんの表情は変わらない。けれど、室内の温度が急激に下がったような、肌を刺すような圧迫感が僕を包み込む。

「……小野さん。先週、君を駅まで送ってきたあの

男だね」

「えっ……？ あ、はい。よく知ってますね……」

「自然に目に入っただけだよ。……それで？ その男と、二人きりで夜にフレンチ、か」

（……怖い。英磨さん、怒ってる……？ 笑顔なのに、目が全然笑ってないような……）

「あの、先に約束しちゃって、すみません……。怒ってます……？」

「怒ってなんていないよ。……ただ、君があまりにも危ういから、心配なだけだ。自分の価値を分かっているんだね」

「え……？」

英磨さんが、わずかに僕の方へ身を乗り出した。それだけで、逃げ場を塞がれたような錯覚に陥る。

「その男は、君が『特別』な身体をしているか、知っているのかい？ ……お酒が入って、誰にでも縋り付くような顔を見せたらどうなるか。想像しただけで、吐き気がするよ」

「そ、そんな……。小野さんはただの先輩ですし、ちゃんと気をつけますから……」

「……俺以外の男に、そんな隙を見せる必要なんてないんだ。君を守れるのも、正しく扱えるのも、世界中で俺だけなんだから」

有無を言わせぬ断定。僕は気まずさを誤魔化そうと、慌ててグラスを口に運ぼうとした。けれど、震える指先がグラスの縁を滑り、中身が僕の膝の上にこぼれてしまった。

「あっ……。うわっ、すみません……。っ！」

冷たい液体が、部屋着の短いパンツの裾から内腿へとじわりと広がっていく。

「汚しちゃった……。英磨さん、何か拭くものを……。っ」

慌てて立ち上がろうとした僕の肩を、英磨さんの

大きな手が、恐ろしいほどの力で押さえつけた。

「動かないで。……余計に染み込むよ」

その声は低く、抗いがたい命令の響きを含んでいた。彼は床に膝をつき、どこから出したのか真っ白なタオルを手にとった。

「可哀想に。……冷たかっただろう、乙哉」

英磨さんはそう囁くと、タオルの上から僕の太ももをゆっくりと拭き始めた。大きな手のひらが、円を描くように肌を圧する。けれど、その動きは次第に汚れを拭き取るという目的を忘れ、僕の下半身の、コンプレックスへと向かっていく。

「あ、あの……英磨さん……？ もう大丈夫です、あとは自分で……っ！」

「ダメだよ。君はこういう時、いつも詰めが甘い。……俺が綺麗にしてあげるから、じっとしていて」

(……待って、そこは、ダメ……！)

抵抗しようとしても、肩を押さえる彼の腕はびくともしない。それどころか、彼の顔が僕の下半身——おまんこに近づき、熱い吐息が直接肌にかかる。

「……中まで染みているかもしれないな。確認させてもらおうよ」

英磨さんはそう独り言のように呟くと、僕が隠すように閉じていた脚の間に手を割り込ませ、部屋着の裾をゆっくりと捲り上げた。

「ひゃっ！？ え、英磨さん……っ！？」

羞恥で頭が真っ白になった。捲り上げられた布の奥、男性としての身体を持ちながら、女性器を持つ僕のおまんこが、英磨さんの目の前で露わになる。

(……うそ、見られてる……っ。英磨さんに、こん



な、恥ずかしいところ……！)

必死に手で隠そうとするけれど、英磨さんの視線は冷徹なまでに僕を捉えて離さない。

「英磨さん、ダメです……！ 見ないで……っ！」

涙目で訴える僕に、彼は慈しむような、それでいて支配的なトーンで言い聞かせた。

「どうして隠すの？ 君のことは、毛穴の数まで把握しているつもりだよ。……ほら、やっぱりショーツまで濡れてる。このままじゃ風邪を引いてしまうし、何より、俺が不快なんだ。君が汚れているのは」

英磨さんの瞳の奥には、僕を完全に支配下においたという確信が満ちていた。彼は僕の細い太ももを掴むと、流れるような動作で僕の脚を大きく割り開かせた。

「っ！？……あ、だめっ……英磨、さん……っ！」

僕は震える手で彼の肩を押し返そうとした。けれど、彼は僕の抵抗を慈しむように、さらにぐいっと膝を押し広げる。

「大丈夫だよ、乙哉。……俺が全部、吸い取ってあげるから」

彼はそう言うのと、まずは素手で僕の内腿の柔らかい部分を、ねっとりと撫で上げた。熱を帯びた大きな掌が、敏感な肌を滑る。掃除とは程遠い、あまりにも執拗で愛撫めいた手つき。

「んう……っ、英磨さん……っ。こんなの、おかしいですよお……っ」

（……だめ、怖いのに、触られるところが熱くて……。英磨さんの手が、すごく、優しくて……っ）

僕の微かな抵抗を無視して、彼の指先が、湿った